

# 天台ジャーナル

The Tendai Journal

第6号

2003年(平成15年)  
9月1日月曜日(毎月1日発行)  
1部50円(送料別)  
発行所/天台宗出版室  
〒520-0113 大津市坂本4-6-2  
天台宗務庁内  
電話 077-579-0022 (代)  
Eメール/T-Press@tendai.or.jp

極微 ごくみ

自然

冷夏で、お盆というのに梅雨のような天気が続いたかと思えば、残暑はことのほか厳しい。農作物には、多大な影響がでそうだ。一方、ヨーロッパでは、記録的な猛暑で、フランスでは死者が五千人を超えたという。水河も溶け始めたという報道だった。そのことは、異常気象が続く。そのことは、これまで、人類が地球環境を破壊してきたことと果たして無縁なのだろうか。人類の歴史は、自然を克服する歴史でもあった。その過酷な作業の中に、人は仏を感じ神を信じてきた。自然と共生することが、現代に生きる我々の課題である。

## 平和への願いをひとつに

### 比叡山宗教サミット16周年



宗教宗派を超えて平和を祈る

## ユダヤとイスラム

比叡山宗教サミット十六周年世界平和祈りの集いが、今年も八月四日に開催され、集まった約五百人の宗教者と一般市民が世界平和の実現を祈

念した。昨年は十五周年として、特にイスラムの宗教指導者を招聘し、9・11テロによって世界に蔓延した「イスラムへの

誤解と偏見」を払拭し、共に世界平和を目指すことが確認された。しかし、その後もイラク戦争にみられるように憎悪の対立は収まっていない。ハイテクの近代兵器に対抗してローテクの自爆テロという「戦争」は、泥沼化してい

る。宗教の対立や文明の衝突と識者は分析するが、世界宗教と呼ばれるどの宗教宗派の神仏も殺人をはっきりと否定している。それなのに、今、世界は互いの神に「相手の殲滅」を祈願しているようにさえ見える。

今回の祈りの集いでは、前イスラエル首長ラビのイスラエル・メイール・ラオ師とパレスチナアラファト議長宗教顧問のシェイク・タラル・シデル師を招き、平和の祈りと対話を行った。現在の中東情勢を考えると、ユダヤ教の代表者とイスラム教の代表者との出会いと対話は、まさに画期的なことである。

そして、更に樋口美作日本ムスリム協会名誉会長から平和についての提言を聞いた。普段では、あまり聞くことのないイスラム側からの提言である。

#### 日本ムスリム協会名誉会長 樋口美作氏 提言要旨

私達ムスリムの共通の願いは、来世において楽園が約束される事でありこれが究極の平和である。その為この現世をいかに生きるかが大きな課題である。クルアーンの教えに基づきアッラーと自分との直接的な関係の中で、また他人と自分との社会的な関係の中で、アッラーへの絶対的帰依と、人類の社会や文化の多様性を容認し、互いに尊重し合う事は、平和的共存を促す基本的な教えであり正義であると信ずる。

したがって、今日とかく論議をかもしているグローバリゼーションの問題にして

も、もしそれが多様性を否定し、単に一国による一極集中的な考えを主張するものであるなら、容認し難いものと成るだろう。

今や両極の過激的な人達の主張する神の名による独り善がりの正義によって、平和の大義が侵されつつあると懸念されている。

半世紀の間、未解決のまま放置されている中東紛争は、パレスチナの人達が起こした紛争ではなかった。私が中東諸国に在住していた時、よく

耳にした彼等の言葉は「俺達は何も悪い事はしていない、どの宗教も民族も皆仲良く暮らしていたんだ」と言う事であった。

天台宗開祖の言葉に「宝とは道心ある人」とある。道心とは、社会の平和、人類の幸福のために社会の一隅に(どこにでも)あつて尽力することである。実は、私はこの言葉を正にイスラームの言う「ジハード」すなわち、刻苦勉強すると言う本義に共通する教えであると思う。

## 素晴らしき言葉たち

Wonderful Words

常懐悲感 心遂醒悟

法華經

「じょうえひかん しんすいしようご」と読みます。訓読みでは、「常に悲感をいだいて、心ついに醒悟す」であります。

この言葉は、法華經第十六章の『如来寿命品』の中にあります。有名な良医治子の譬えです

「医師である父が不在の間に、毒を飲んで苦しむ子どもたちに、帰宅した父は薬を調合する。飲んだ子は全快したが、飲まない子どもたちのために父は旅に出て、旅先から父は死んだと知らせる。病児はそれを聞いて悲しみによって心が醒め、薬を飲んで治る」という話です。

悲しみを抱いていると、心は遂に醒め悟りにいたるとは、違和感をもたれる方もあるかと思えます。悲しいこと

# 授戒三聖の念持仏

## 極細密の匠の技 受者全員に特別授与



開宗千二百年  
慶讃大法会事務局



上・授戒会の様子（於：京都真正極楽寺）  
右・極細密影のお姿、像高わずか12mm（舍利塔高さ50mm）

平成十八年一月二十六日に迎える天台宗開宗千二百年を記念して、慶讃大法会が本年四月一日から始まりました。

檀信徒の皆様には、「あなたの中の仏に会いに」をスローガンに、総授戒をお薦めしています。

このお授戒では、授戒三聖として釈迦様を中心に、文殊菩薩様、弥勒菩薩様から戒を授かります。特に両菩薩さまは僧侶のお姿となって直接皆様をお導きさせていただきます。

戒を授かるとそれまで気づかなかった自分の中の仏性（仏となる種）に目覚め、自然と仏様のみ教えを護

るようになる」と説かれています。

大法会事務局では、お授戒を受けられた方々が、未永く仏様に護られ、仏様の願われる道を歩んでいけるように、極細密の手彫り木像授戒三聖像を舍利塔に収めた念持仏（写真右）と、常に身につけていただけるようお守り袋を謹製いたしました。

今回の大法会期間中にお授戒された皆様には、法名・血脈譜等のほか、特にこの念持仏をお授けしています。又とないこの勝縁を是非皆様にもお結びいただきますようご案内いたします。

## 藤光賢大僧正が 戸津説法を勤める

大津市の東南寺で行われる戸津説法の説法師を、今年も九州西教区金乗院の藤光賢大僧正が勤めた。

戸津説法は、伝教大師が父母の菩提をとむらうために法華経を説いたのが始まりである。

説法師を勤めると、天台座主への有資格者である望擬講に補せられるため「天台座主への登竜門」といわれる。藤

大僧正は、前天台宗事務総長。

八月二十一日から二十五日までの五日間、法華経の開経である無量義経から、二十八品、そして結経の観普賢経までを講説し「法華経を聞くものは、必ず仏になることが約束されている」と、連日、聴聞のために東南寺を埋め尽くした聴衆に優しく語りかけていた。

「信仰とは、利害打算から

発するのではなく、とにかく、心の底から信ずるといふ姿勢が大事。曇りのない心で法華経を聞き、御仏を念ずれば必ず功德を与えて下さる」と訴えた。

藤師は「浅学非才の身であり、渡邊座主様下から指名を受けたとき随分悩んだが、宗祖大師への報恩感謝の気持ちで勤めさせて頂いた。猛暑にもかかわらず

聴聞頂いた皆様に心より感謝申し上げます。九州から戸津説法師を勤めたのは、藤師が初めて。



## 西郊総長ドイツ平和の祈りで 核開発保有反対を表明へ

### 核開発保有反対を表明へ

九月七日から九日にかけて、聖エジディオ共同体主催による「第十七回世界宗教者平和の祈りの集い」が、ドイツのアーヘンで開催される。

世界中から諸宗教の代表者が集い、講演のほか、平和への祈りや行進が予定されている。

平和の祈りは、日本では、比叡山宗教サミット」として開催されており、本年も八月四日に比叡山上で十六周年の記念行事が行われている。

今回日本から天台宗、曹洞宗、臨済宗、立正佼正会、神社本庁、大本・人類愛善会、WCRP日

本委員会、天理教、アムネスティインターナショナル、カタリック関係、生命山シュバイツァー寺院の代表等五十八名が出席。



平和の灯をともし半田大僧正（昨年、イタリア・パレルモで）

八日に講演を行う西郊総長は、「私共が憂慮していたイラク戦争がついに引き起こされ、数多くの尊い人命が失われた。双方の正義と大義の裏に、互いの宗教に対する偏見が抜き難く存在しているように思われる。私共宗教者は、これらの問題に粘り強く対話を続けて参りたい。今こそ、仏教者が各宗教間の対話の橋渡しをすべきであることを強く再認識する」とし、「日本の平和の基本は平和憲法を守り、非核三原則を徹底して守り抜く事である。即ち核を作らない、持ち込まない、使

天台宗務庁 総本山延暦寺御用達

## お数珠専門の老舗 小野珠数店

〒604-8045 京都市中京区寺町通蛸薬師下ル円福寺前町272

電話 075 (221) 2608 番  
FAX 075 (256) 3288 番

用しないという原則である。我々は、世界で唯一の被爆国であり、全世界に、どのような国も核を使用する事のないように、また核を保有することのないよう訴える。今、核を政治的な道具として脅しをかけている国が世界の問題になっている。われわれ宗教者は一致団結して、この危機を未然に防ぐ責務がある」と訴え更に「日本の将来の平和を考える時、日本の宗教指導者が互いに対話し、相互理解と尊重の上に立つて共に祈り、平和の使者となる、という自覚に立つて行動する事が大切な要件になる」と表明する予定である。

# ハワイ開教奮戦記(一)

荒 了寛(カットも筆者)

天台宗が海外開教に取り組んで、今年で三十年になる。その魁として、ハワイに渡り、別院を創設し、今日まで布教を続けてこられた荒了寛開教総長のご苦労は、筆舌に尽くしがたいものがあると推察する。それを、筆に尽くして頂こうというのが、この連載の趣旨である。天台ミツシヨン・オブ・ハワイはどのような根を張り、枝葉を繁らせてきたのか。これから十二回にわたって展開されるのは「実録・ハワイ開教秘話」である。

## 信徒も、後援者も、墓もなく

ハワイ別院が開かれて今年で三十周年を迎えることになりました。三十年という歳月は長いのか短いのか。この数年、各宗の別院が相次いで「ハワイ開教百周年」を祝ってきた歴史には比較になりませんが、ゼロからの開教に人生を賭けてきた者には充分に重く長い三十年でした。事業団関係者はじめ、当初から協力し支援を続けてこられた方々も、それぞれに格別の感慨が

あろうかと思えます。

この機会に、その三十年の苦労話をまとめてみたいかと、本紙の編集部から有り難いお話を頂きました。いい記念になるのでお受けすることにしましたが、編集部の希望は公式な報告書のようなものでなく「ハワイ貧乏物語」というようなタイトルで物語風に書いて貰いたいとのことでした。「貧乏物語」ではちょっと刺激的な気がしますので、

## 大喝痛棒

### 鬼手仏心

最近、今東光大僧正のことが、しきりに思い出されてならない。中尊寺の貫首であり、国会議員にもなられたが、世間では毒舌和尚という異名で知られた。

「自首するより死んだほうがいい。悪いことは言わん。死にな。二十三歳にもなつてそんな電話かけたりするバカなら、自首するより死んだほうがいい。自首すりゃあ恥をかかからね。切に自殺をお勧めいたします。」

ある人生相談の回答である。僧侶なのに、なんと乱暴

天台宗宗務総長 西郊 良光

など、憤慨するむきがあるかもしれない。が、ちよつと待つてもらいたい。この相談は、好きになつた中学生の女の子の家に、毎日イタズラ電話をかけてしまうという二十三歳の男からのものである。もちろん、今大僧正の本音は「死ぬ」にあるのではない。そんなことでどうするか、人生を無駄にするな、しっかりせい！と大喝をくらわせているのである。仏法というのは、中道を説くが、穏やかで優しいばかりのものではない。どうしようもない輩には、時に

はこれぐらいのことを言つて目を覚ませなくてはならないのである。不動明王の憤怒の相が浮かぶ。それにしても、この相談者は自分のどうしようもなさを自覚して「自首しようか」と相談しているのだから、まだ救いがあるというべきか。三十年前のことである。一例は挙げないが、その時代に比べて青少年の荒唐と世相の混乱はますますひどい。近頃の世相を見るなら、今大僧正はどのような大喝を落とされるだろうか。

忘れられない思い出のいくつかを回想風に紹介させて頂くことに致しました。

しかし、何もかもゼロからの開教に取り組んできた者が書けば、どうしても貧乏物語風になるかと思えます。或いはかえって、そういう側面からの記録を残しておくことも、これからの海外開教の参考にもなり、同じ轍を踏まぬためにも意味のあることと思えますので、敢えて生活体験的な面から書かせていただくかと思います。

正直なところ、これまで何が一番つらかつたかと云われれば、毎月毎月の寺の維持費と生活費をどうやって賄つていくかということでした。その状況は今も殆ど変わつてはなないのですが、日本の方々からみると、それは住職の能力と努力の問題ということになります。

事実は全くその通りなのですが、私のように、中年半ばではじめて海外にでて、信徒も後援者もなく、墓地もない寺に入つて、寺以外には生活手段のない渡航者は、とりあえずどうやって生活しているのか、ということになります。五年か十年、全精力で布教に努めれば、何れは寺を維持できなくなるの信者が集まってくる筈だとは思つていても、それまでの五年・十年の間、寺の維持費をどうするのか、住職や家族はどうやって生きていくのか、私はまずその問題に取り組んでいかねばなりません。今になってみれば、なんとも愚かな試行錯誤を繰り返してきたものだと思うのですが、そのうち仏画

を描き、法話集をだし、頼まれればアメリカでも日本へでも出かけて講演を引き受け、それらの収入が何とか寺の経営を支えるようになりまし。止観や密教関係のテキストなど、天台関係の仏典の英訳やその出版もそうした収入によるものでした。

一方、ともかくもこの三十年で、天台宗を名乗る寺がハワイに四カ寺、アメリカ本土に三カ寺になりました。それを

それに設立の経緯や事情の違いはありますが、これらの寺は何れも、直接間接、ハワイ別院があつて実現したものです。別院の役割はこういうところにあるべきで、その意味ではハワイ別院も一応の役割は果たしてきたと思うのですが、経営という面からみれば、これらの寺の中でハワイ別院が最も弱いということになります。

それはなぜか。勿論住職の



経営能力にもよりますが、ハワイ別院以外の住職はアメリカ人です。アメリカに生まれ、アメリカで生活してきた人には、言語・思想から生計の手段まで、住職となる以前に確かな生活基盤があります。必要とあれば住職をしながら前の仕事や職業を続けることもできるし、逆に仕事を続けながら住職となることも可能です。この事は、海外で新たな寺を建てる時に、現実的に重要な意味をもつこととなります。

天台宗が今後、天台仏教を海外に広め、それを根付かせていくためには、現地生まれの僧侶を育成し支援していくことが不可欠です。そのためには別院の存在と指導力が重要です。

三十周年を機に、宗門としてすぐれた人材を海外に送り、布教に専念ができるような支援体制を整えて頂けるよう切望してやみません。

## シンポジウム

### 「こころの教育を考える」

天台宗総合研究センターでは10月7日(火)にシンポジウムを行います。参加ご希望の方は下記日程をご覧の上、天台宗総合研究センターまでご連絡下さい。

日時：10月7日(火) 午後1時～5時  
場所：大正大学(東京都豊島区西巣鴨3-20-1) 二号館八階会議室  
主催：天台宗総合研究センター(天台宗総合研究センター第2班)  
参加費：無料(要予約)  
問い合わせ：天台宗務庁教学部  
電話 077・579・0022 まで

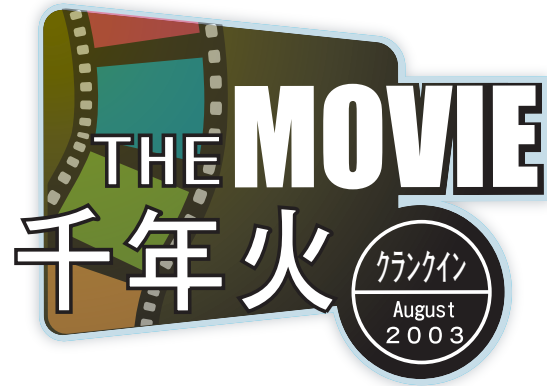
#### パネリスト：

山口和孝氏(埼玉大学教育学部教授)  
小川雅康氏(元大府市大府小学校校長)  
大谷いづみ氏(東京学芸大学教育学部附属高校大泉校舎教諭)

#### コーディネータ：

村上興匡氏(天台宗総合研究センター研究員 東京大学大学院人文社会系研究科助手)

# 千年家の灯をモチーフに 映画の制作進む



## 海を渡り、そして―― 少年は大人になる

伝教大師が、九州の横大路家に授けた「法灯」をモチーフにした映画撮影が進んでいる。

この灯は、大師が中国から帰国した時、博多に独鈷寺を建立するにあたり、それを助けた猟師に苗字と共に与えたものである。以来、「千年家」と呼ばれる横大路家(国の重要文化財)に千二百年にわたって伝えられている。

映画は公設文化ホール「そびあしんぐう」を運営する福岡県新宮町文化振興財団が制作する「千年火」。公設ホールの映画制作は全国で初めて。

ストーリーは、両親の死によつて口がきけなくなった少年が、新宮町の祖父母(金内喜久夫・吉行和子)にひきとられ、ユニークな老人(丹波哲郎)をはじめ、あたたかな人々と豊かな自然とのふれあ

いの中で立ち直つてゆくという物語である。

この映画で、丹波哲郎が護つている千年の間一度も消えたことのないというカマドの火は、「不思議な力」を持つたものとして描かれる。その火は「ちとせ火」と呼ばれ、年に一度火渡し神事として村の家の幸せを願つて配られるのである。

### そのままがいい

十二月に公開予定の映画は、八月にクラクションした。プロデューサーの増永研一氏は「公設ホールが、外に向かつて発信できる手段として映画は最適。千年の火をモチーフにして新しい物語を展開したい」と語る。すでに町の女性達を中心に映画を手伝うボランティアグループ「千人委員会サポーターズ」も立ち上がり、町おこしとしても

上々の手応えという。制作デスクの水田由紀子さんに、撮影現場を案内してもらった。

新宮町から、渡し船で二十分ほどの相島を舞台に撮影が進んでいた。スタッフ、キャスト総勢五十人ほどが、島の民家を借り切つて足の踏み場もないほど機材が展開されている。「そこ、掃除しろ」「戸、はずせ」「吉行さん、入りま

怒号を擱くのは、監督の瀬木直貴さんだ。「坂の上のマリア」など地域発信の映画づくりを得意とする。

「地域社会の豊かな可能性と、自然を信じる」という瀬木監督は「十代前半の子どもたちは、外部に向かって発信することが不得意のように思う。だから、閉じこもろうとする。そうではなくて、君は、そのままがいいんだということを示したい」と話す。

### 海・原生林・火

映画で、力を込めて描きたい部分は三つあるという。「海と、原生林と、火」である。海は、島と本土の間に横たわっている。この間三・二キロを島の少年たちは泳ぐのだ。そのことは大人になる通過儀礼でもある。また、新宮町にある約六百本のくすのきの原生林は特別天然記念物で

もあり、豊かな生命を象徴している。映画は、少年が愛情と自然によつて大人になってゆく、ファンタジックな一面を持つている。

映画の主役である少年・聡(十一歳)は、四百人のオーディションの中から選ばれた村田将平君である。東京出身で夏休み期間中、スタッフと新宮で合宿している。水田さんによれば「マジで東京に帰りたいナート、映画の主人公そのままのセリフを言つてます」とのことである。

### 地域の祭り

高木義輔新宮町文化振興財団常務理事は「ハコモノ行政の批判もあるし、これからいつまでも補助金をあてにできない。自分たちでチャレンジしていかないと」と語りつつも「長崎の不幸な事件もありましたが、子どもを育てるのは地域なんです。そのために、

お祭りを作りたかった」と語った。

少年をサポートする少女・あゆみ役を演じるのは、地元山下奈々さんである。あゆみは、父親が蒸発した過去を持つている。過去の苦しみを少年と共有するキーマンのひとりだ。

映画のクライマックスは、少年たちが、火渡し神事で島から陸まで泳ぐシーンだ。渡りきつてはじめて一人前と認められるのである。

そして、渡りきつた子どもたちが、ちとせ火の松明を持ち、家々に配ることを許されるのだ。この遠泳で起きる、いくつかのエピソードを経て、主人公は声を取り戻す。

だが、声を取り戻す予兆は、すでに画面のあちこちにある。閉じこもっていた少年の殻が、しだいに膨れあがり、壊れる寸前になってきている。それは、愛情と自然と

が少年の心に沁みているからだ。遠泳は単なるきっかけにすぎないようにも思える。

オキナ、正装でかまどの火を松明に移す。燃え移る火。聡、オキナからその松明を受け取る。

オキナ「ちとせ火です。お願いしますよ」

聡「はい」

漁村集落の坂道(夕暮れ)、火のついた松明を持って歩いていく子どもたち。

町角では、人々が各自持参したろうそくに火を移す。

聡、火を移す度に一礼し、また歩き始める。

(シナリオ・高坂圭より)

両親を失い、声を失った少年は、不思議な力を持つ「千年の火」に導かれながら、海を渡つてゆく。今度は自らが、その火を家々に届けながら、そして、少年は大人になるのである。

### お便りを下さい

あなたの周りでの出来事、ご感想をお送り下さい。また、取材について「こんな出来事、あんな人々」をお知らせ下さい。封書、FAX、Eメールで、天台宗出版室まで。連絡先は、題字横です。

FAXは、077-578-4814



主演の村田将平君(中央)



吉行和子さんに演技指導する瀬木監督